

## E. 結論

川口町は、総代を中心とした自治や親族組織、現場住民や利用者をよく知る施設関係者や各住民たちの働きによって、孤立状態と長期化した避難生活を凌いだことが明らかとなった。要援護者の安否確認もこの共助の枠組みで迅速に行なわれ、そのうち家屋から救助され、医療機関へ搬送された例もあった。

しかし、たとえ共助がよく機能していたとしても、被災時に本来機能すべき公的支援の網からこぼれ落ちる事例も見られた。例えば、人工骨の施術を受けた住民が、平時には問題なく生活していたが、避難生活の中で思わぬ怪我をし、頭皮の化膿によって人工骨を取り外す手術をしなければならなくなった例や、避難所での迷惑を考えて倒壊寸前の家に留まったり帰宅する学習障害の母子の例があった。このことは、公助や共助にはそれぞれ対象範囲に枠組みがあり、いかに優れた支援ネットワークを形成していても、一方だけでは要援護者ニーズをすくいとることに限界があることを示している。すなわち、平時において生活に支障のない人であっても、非常時には新たなニーズが発生するため、被災した環境での親族ネットワークや地縁だけで支えきれない事例が多くあることを認識した準備を行う必要であることが、改めて示された。また支援体制は、公・共・自それぞれが閉じたものとしてあるべきではなく、福祉職員や医療者、自治体、親族組織とそれを運営する人が、要援護者を支援ネットワークから断ち切らないように、日常的に緩やかに連携しあう必要がある。その意味では、要援護者からのニーズに関する情報提供も必要である。

こうした前年度の事例と展望を踏まえて、本報告では、行政の中核が機能停止していた際に、現場で住民との〈顔の見える〉関係を築いている保育園職員や教職員、民生委員、保健師の働きや、集落組織の長の判断に支援体制の連携のあり方と、要援護者への対応のヒントをみつけることができた。しかし、現場に近い人びとは、

同時に現場の住民で被災者でもあり、その体制には限界がある。したがって、今後その限界の背景と解決策をさらに検討し、常日頃からどのような場合に、どこを避難所とし、どのような支援体制が有効であるかを要支援者を含めた住民と各組織関係者が話し合っておく必要がある。

最後に本調査により見出された対策を列挙する。

## 1. 縦割り・分業体制の解消

被災時に、施設管轄組織の判断を仰がずに、一定の条件を満たせば自動的に地域住民が避難所を運営できるようなシステムがあるとよい。

## 2. 福祉避難所の役割の明確化

乳幼児に関する支援は保育園に行けばそろろうというように、福祉避難所の役割を明確にし、それに備えた備蓄、避難所運営のための権限を整備しておく必要がある。また平素、地域にて問題なく生活している人びとに対しては、保健師や看護師、福祉関係者が訪問し、その情報を共有するべく、福祉施設が中核施設になるようなシステムを整備する必要がある。

## 3. 代替施設と組織

学校や保育園が避難所機能を継続せざるを得ない場合、保育活動や教育活動を代替しうる設備や人材、システムを備えておくことよい。

## 4. 複合的組織間での各長の日常交流

地域に密着した組織長と、行政職員、各施設職員の合同会議が日頃からあると、顔も把握しあえ、非常時に話し合いがスムーズになり、判断も早まる。

## 5. 利用可能な資源の把握と備蓄

調査では地縁や親族組織が機能した条件のひとつとして、地域内の水源や水槽、発電機など、私財や共有材を含めた諸資源を活用したことがあった。農業を生業としない地域であっても、発電機など普段の町内祭礼にも利用可能な防災用具を各地区が保管し利用可能にしておくことや、何を備蓄しておくのがよいかを行政と住民とで話し合っておくことが重要である。

6. 地縁組織に代わる組織の構築

都市部では、誰が隣に住んでいるか分からないと言われるように、川口町の総代の活躍に代表される中越地域の共助は機能しない可能性が高い。そこで、災害時に地域が孤立化しても支え合えるために、中山間地域の共助に代替する町会組織やPTA、サークル活動、散歩仲間など、地縁を起点とした、多世代を交えた多様なネットワークを普段から育み、そこに各自がつながりを持つことで、被災直後の支え合いの土台を日頃から作っておく必要がある。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

①論文発表

なし

②学会発表

- Ikuko Mamiya. “Disaster Preparedness: Recommendations from the Case Study, Mid Niigata Prefecture earthquake”. The 2nd International Conference on Disaster Preparedness for Persons with Disabilities 12-13 May, 2009.

参考文献

- 小千谷市魚沼市川口町医師会『小千谷市魚沼市川口町医師会の医療活動の記録』2006年。
- 川口町教育委員会川口町教職員協議会『新潟県中越大震災一周年復興祈念 川口町児童生徒震災体験記：試練を乗り越えて』2005年。
- 川口町『川口町障害福祉計画 平成18年度～平成20年度』平成19年3月、2007年。
- 川口町役場企画商工課企画・編『震度7!その時わたしは 忘れない大震災の記憶 川口町震災体験集』2005年。
- 川口町役場『広報かわぐち』2004年。
- 川口町役場企画商工課編、川口町震災復興対

策本部「川口町震災復興計画」2005年。

- 桑原昭「予期しなかった新潟中越地震の体験から」『やまなし福祉救援活動フォーラム 2010～災害にも強いまちづくりを目指して～』（山梨県社会福祉協議会・山梨県郡市町村社協会長連絡会・山梨県民生委員児童委員協議会主催）2010年。
- 佐藤正司（新潟県魚沼地域振興局健康福祉部長）「震災における保健所の取り組み（中越大震災の経験から）」、2005年9月13日。
- <http://www.phcd.jp/katsudou/soukai/niigatajishin-satoh.pdf>
- 須田裕子「大震災が教えてくれたこと、そして...」『21世紀の公衆衛生をひらく保健師をめざして』（ほたか21世紀塾編）2005年。
- 全国保健師長会新潟県支部『7.13新潟豪雨災害及び中越大震災における新潟県の保健師活動記録』平成18年4月、2006年。
- 新潟県川口町『第5次川口町総合計画』
- 新潟県川口町「統計からみた川口町 20」平成20年度版、2008年。
- 新潟県中越大震災記録誌編集委員会『中越大震災〈前編〉雪が降る前に』ぎょうせい、2006年。
- 練馬区危機管理室防災課『川口町支援報告書』2005年3月。  
<http://www.city.nerima.tokyo.jp/bousai/kawaguti/>

<sup>1</sup>今年度は被災後5年を過ぎた時期であり、「今さら」という声があったと同時に、他方で「今だから」と話を切り出してくれた障害当事者や役場職員がおり、被災6年目の調査の意味を問われる場面がしばしば生じた。調査員が中越大震災の被害から学び、全国での防災の取り組みに活かしたいという研究の趣旨を説明することで理解と研究への協力が得られたが、今を生きる被災地からの声の重みを改めて感じる場面であった。すなわち、現場は表面的には復興に向かってみえるが、話を聞いてみると、個人にとって5年目のいまは単純に一様ではない。むしろ、被災以降生活復帰が容易であった人、自宅

が全壊し失業した現役世代、両親が離婚した子どもなど、それぞれにとっての様々な6年目があることが語りにも表れており、客観的数値だけでは測定できない被災経験の多様さを明らかにする調査となった。また、調査に応じてくれた住民からは、復興プロセスも含めて長期にわたる調査の継続を求める意見も聞かれ、今を生きる人々を取り巻く文脈を受けとめ分析していくことの重要性が再確認された。

<sup>2</sup> ただし、人や車両の移動があったことが様々な記録に残されている。代表的な例は、「ふるさと友好都市」であり災害時の相互援助協定の提携を結んでいた東京狛江市の記録である。狛江市は役場職員と携帯電話で連絡を取り合いながら翌日24日以降支援物資を継続的に届けていた。

<sup>3</sup> 秦康範「新潟県中越地震における行政機関の初動対応」2004.12.21 平成16年新潟県中越地震被害調査報告会 142p

<sup>4</sup> 一般に、「ハネムーン期」とは、被災者の心身状態を示したもので、被災直後から1ヶ月頃の期間を指し、被災者同士で連帯感が生じたり、高揚した状態で復旧に躍進する時期を意味する。劇的な災害の体験を共有し、くぐり抜けてきたことで、被災者同士が強い連帯感で結ばれ、この被災地全体が暖かいムードに包まれる時期である。本論での表現は、その意味する点が異なると推測されるが、災害時には平時と異なり、初めて体験する事柄について、共有されやすい様々な表現方法を用い、被災者同士がお互いのコミュニケーションが図っていたはずであり、こうしたコミュニケーションが日々の生活を支えていたことを重視し、インフォーマントの表現を、発話された状態のまま記載する。

東京都福祉保健局「災害時の「こころのケア」の手引き」、2008年。

<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/chusou/video/leaf/files/saigai.pdf>

<sup>5</sup> カマボコ型の車庫は屋根が軽く、豪雪に耐えうる構造になっていたため、被災地の各所で安全な避難場所として利用された。旧山古志村では多くの家屋が全壊したにも関わらず、多くの世帯でこの型の車庫だけが被害を免れた集落がある。

# 地域防災フォーラム

日時：2009年2月19日（木）18:30～20:30

場所：浦河町総合文化会館 ふれあいホール

主催：社会福祉法人浦河べてるの家

後援：浦河町民憲章推進協議会、浦河町教育委員会

## ◆プログラム◆

- 18:30 開会挨拶  
浦河べてるの家理事長  
佐々木 実
- 18:35 基調講演  
「浦河の地震・津波」  
講師：島村 英紀氏  
(地球物理学者・元北海道大学教授)
- 19:35 美波町視察団からの報告
- 東町第5自治会会長  
米山 豊氏
  - 浦河べてるの家  
浦河向陽園
  - 美波町の取り組み  
西の地防災きずな会  
浜 武明氏・酒井 勝利氏
- 20:25 閉会挨拶  
浦河町民憲章推進協議会会長  
木下 富雄氏
- 20:30 閉会

コーディネーター：八巻 知香子

### ◆展示コーナー

備蓄が大事☆防災グッズ  
パネル  
DAISY (デイジー)  
防災マニュアル

### 安心グッズ

～べてるの家が中越地震体験者に聞いた災害時  
実際に役立ったもの・こと～

◆トイレットペーパー ⇒お店では買えなくなる  
ので買い置きがあると安心

◆生理用品 ⇒おむつ、女性用生理用品を多めに  
備えておくと安心・止血もできます！

◆黒いごみ袋 ⇒おむつなど人前で出しにくい  
ごみを捨てられます！

◆携帯電話の充電器 ⇒車の中でも充電できる

◆ろうソク ⇒懐中電灯より広い範囲を照らす  
ので役に立ちます！

◆薬の場所 ⇒ 薬の場所を決めておくと、避難  
しているとき自分が取りに行けなくても、代理の  
人に取って来てもらえます！



第1部 「浦河の地震・津波」島村 英紀氏（地球物理学者・元北海道大学教授）

海底地震の専門家として国内はもとより国際的にも第一線で活躍していらっしゃる専門家として起こしいただきました。島村氏は昭和57年の浦河沖地震の際には実際に浦河を訪れ、浦河漁業協同組合の方の協力により海底地震計を設置して実際に地震の時に海底で何が起きているのかを研究されています。これまでの研究の成果をもとに、「浦河沖は大丈夫？どんな事が起こるの？」という浦河町民の疑問に専門的な知識からお答頂きます。正しい知識なしでは対策は立てられません。

第2部 徳島県美波町視察報告など

発表者：東町第5自治会会長 米山 豊氏

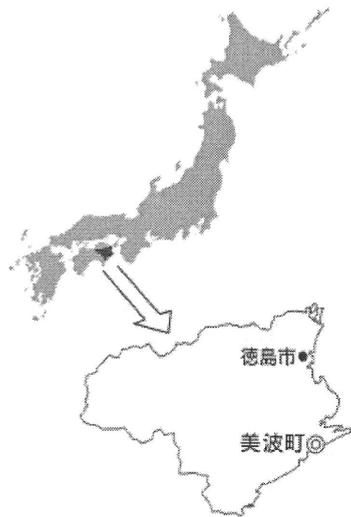
西の地防災きずな会 副会長 浜 武明氏・副会長 酒井 勝利氏

徳島県美波町は、日和佐町と由岐町が平成18年に合併して誕生した町で、うみがめと伊勢エビのまちとして知られています。浦河町と同じく、漁業が盛んです。

昨年のフォーラムでは、美波町の浜大吾郎さんから、南海地震による津波に備えて、町役場自治会などが協力して様々な取り組みを行っている様子を紹介していただきました。昨年11月末、浦河町からの視察団で美波町の津波防災対策を学ぶことができました。

今日は、美波町の対策から視察団が学んだことを報告し、また美波町西の地防災きずな会のお二人に自治会の立場で「避難まつり」「バンブーハウス」など実際の取り組みを紹介していただきます。

豆知識：今年9月からのNHK連続テレビ小説は美波町を舞台にした「ウェルかめ」です。



美波町視察 行程表

浦河べてるの家 福祉推進事業 / 厚生労働科学研究費補助金 共同事業

日時: 2008年11月27日(金)~30日(日)

場所: 徳島県 美波町及び周辺地区

参加者:

(合計14名)敬称略

【A班】28日出発

米山 豊(東町第5自治会)  
 高田 則雄(築地自治会)  
 山村 光司(浦河町教育委員会)  
 菅原 克一(向陽園 施設長)  
 瀬尾 泰治(向陽園 スタッフ)  
 松本 久美(べてるGH世話人)

【B班】27日出発

佐々木 実(べてる法人理事長)  
 池松 麻穂(べてる就労支援スタッフ)  
 早坂 史緒(べてるGHサービス管理責任者)  
 秋山 里子(べてる防災担当・メンバースタッフ)  
 佐藤 俊介(べてるメンバー)  
 川端 俊(べてるメンバー)  
 亀井 英俊(べてるメンバー)  
 八巻知香子(国立がんセンター研究員)\*

\*東京-徳島往復での参加

【11月27日(木)】

9:00 浦河 → 新千歳空港 → 神戸空港

17:00 ホテル(阿南市)着

【11月28日(金)】

6:30 浦河発(A班) →17:00 ホテル着

9:00 ホテル出発(B班)

10:00 富田ケアセンター視察

13:30 養護学校視察

16:00 美波町役場着  
 町幹部と面会

18:00 ホテル着

【11月29日(土)】

9:00 ホテル出発

10:00 美波町役場着

日和佐地区防災施設

津波避難タワー視察

11:00 NPO・ボランティア

団体交流会見学

13:00 由岐地区防災施設

・木岐地区

・由岐湾内地区

16:30 西の地公民館着

17:00 西の地防災きずな会

防災ディナー交流

19:30 ホテル着

【11月30日(日)】

8:00 ホテル出発

神戸市へ

10:30 人と防災未来センター着・見学

12:00 移動・神戸空港へ

13:00 神戸空港 → 新千歳空港

20:00 浦河着

# 地域防災フォーラム

美波町視察団 米山 豊氏

2009. 2. 19

主催/社会福祉法人浦河べつるの家  
後援/浦河町民憲推進協議会

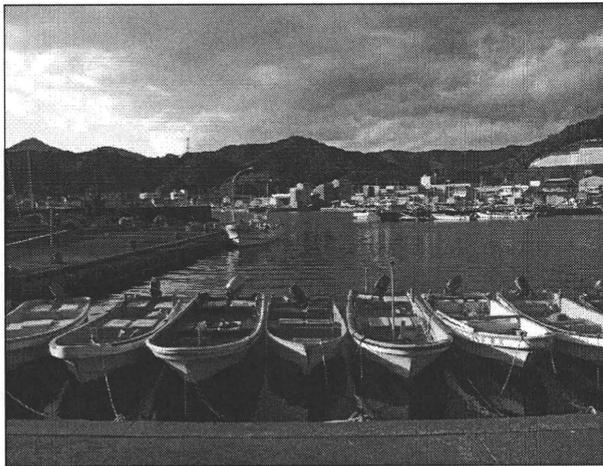
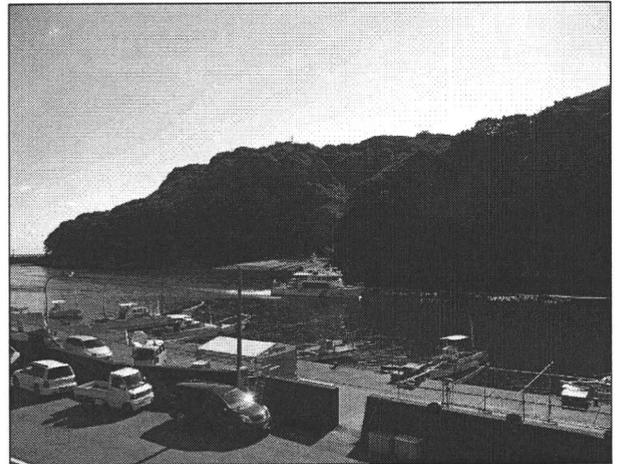
## 美波視察先一覧

11月27日～30日

- 富田ケアセンター視察
- 阿南養護学校ひわさ分校視察
- 美波町役場にて町幹部と面会
- 日和佐地区防災施設
- 津波避難タワー視察
- NPO・ボランティア団体交流会見学
- 由岐地区防災施設・木岐地区・由岐湾内地区  
西の地防災きずな会 防災ディナー交流
- 神戸市にて、人と防災未来センター見学

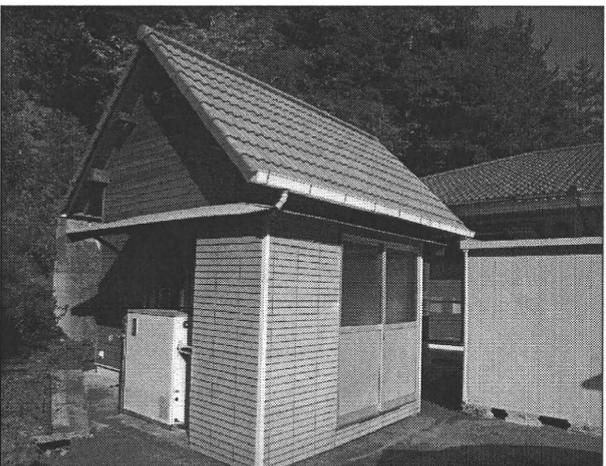
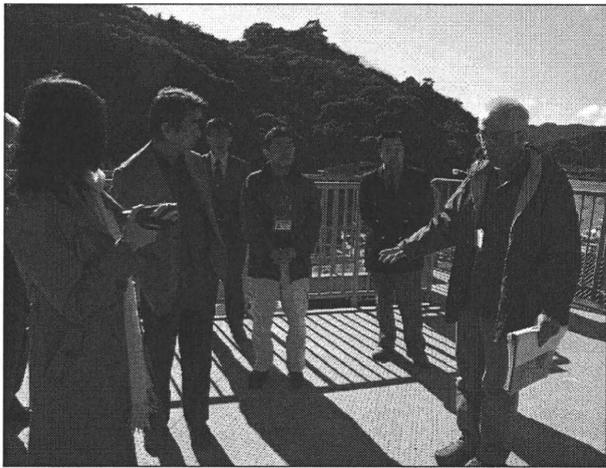
## 日和佐浦地区津波避難タワー

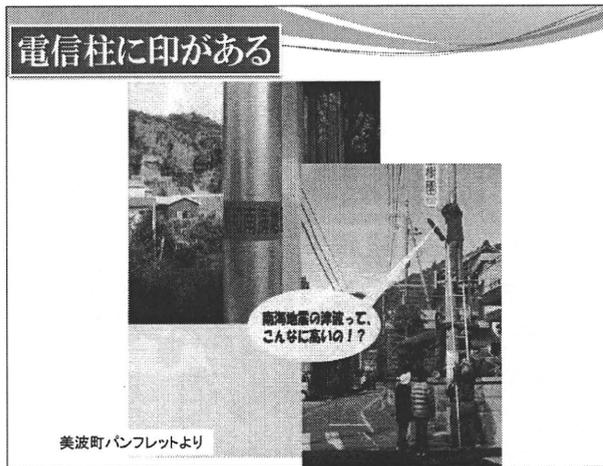
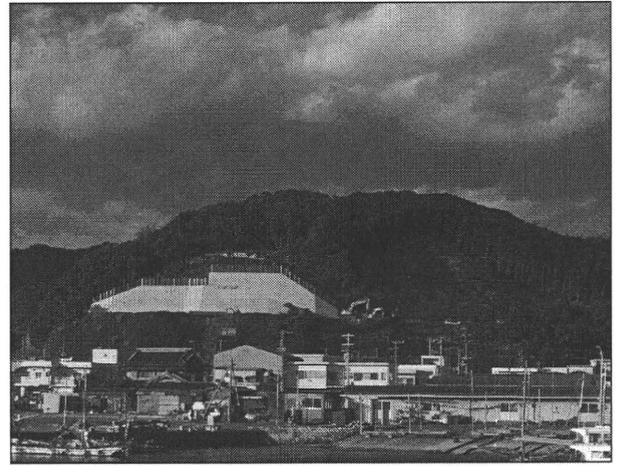
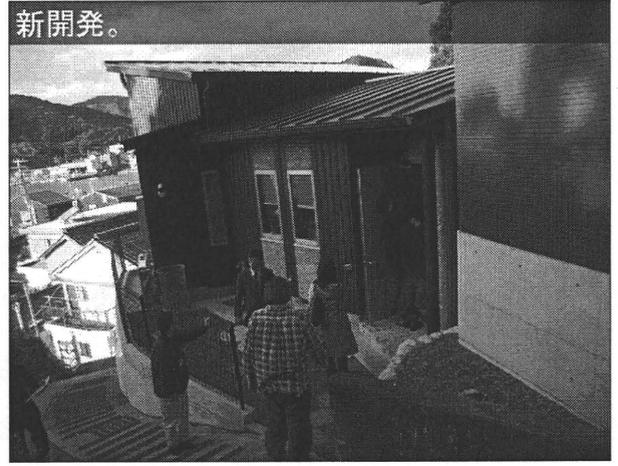
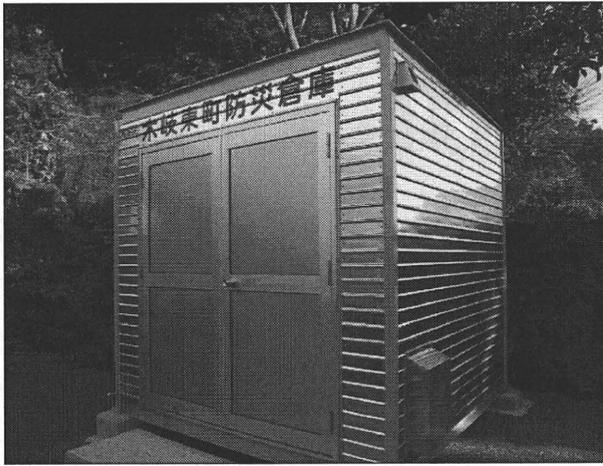
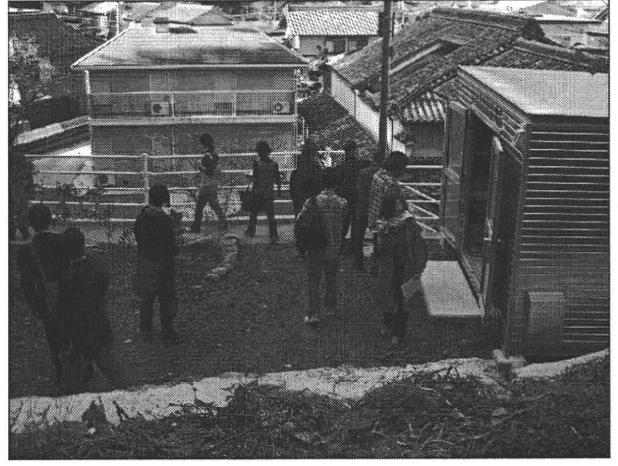
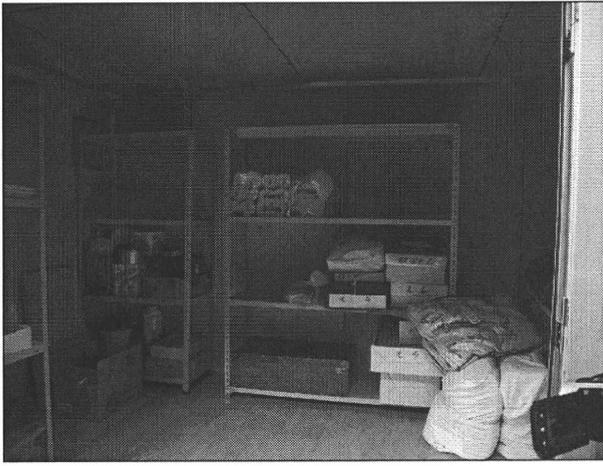
美波町日和佐浦地区は、徳島県津波浸水予測調査において日和佐漁協前での津波想定高6.11m、想定浸水深が最大で3m

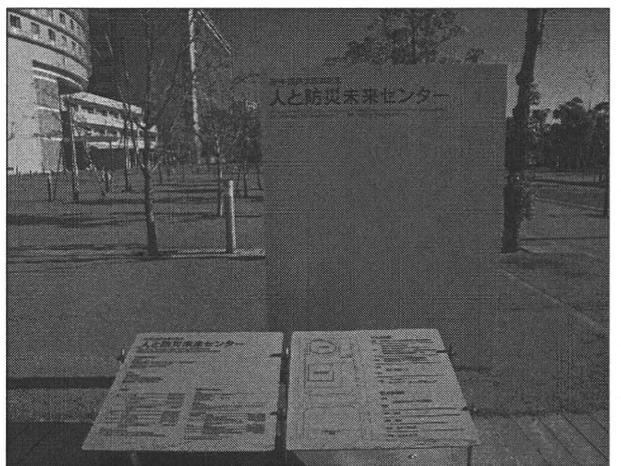


## 日和佐浦地区津波避難用タワー









＜浦河町 地域防災フォーラム プログラム＞

日時：2010年2月23日（火） 18時半～20時

場所：総合文化会館 ミニシアター

講師：谷川三郎氏（阪神淡路大震災記念・人と防災未来センター 語り部）

- 18:30 1. 開会あいさつ（町民憲章推進協議会 桜庭会長）  
18:30～19:10 2. 講演「阪神・淡路大震災 ～その体験を語る～」（谷川三郎氏）  
19:15～19:50 3. 町内の地域防災活動の報告  
東町連合自治会、浦河町役場、浦河向陽園、浦河べてるの家（各10分）  
19:50～20:00 4. 総評（河村宏（仮））  
20:00 5. 閉会

主催 国立障害者リハビリテーションセンター研究所

共催 浦河町 浦河町教育委員会

災害対策における要援護者のニーズ把握とそれに対する合理的配慮の基準設定に関する研究

協力 東町連合自治会、浦河向陽園、浦河べてるの家、（人と防災未来センター）

資料地域防災フォーラム発表概要

無断転用を禁止します。

【基調講演：谷川三郎氏の講演概要】

谷川三郎氏 財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構 人と防災未来センター 語り部ボランティア／もと芦屋市役所建設部長

1) 震災直後の芦屋市の様子ー地元CATVの記録映像の説明

私は阪神淡路大震災に遭い、「人と防災未来センター」（以下、センターと記す）で語り部をしています。センターの語り部は40名おりますが、助けに行くほうの立場の方、すなわち行政職員としての語り部は1人しかいないのです。

私ははじめに必ず申し上げております。こんな大災害がおこったら、市役所の職員も消防の職員も皆さんのところには来れません。ですので地域のリーダー、地域の皆さんが助け合うことが大事だと思っています。なぜ市役所の職員が来れないか、このあと話しますので、よろしくをお願いします。

今日はビデオを持ってきました。このビデオは芦屋のケーブルテレビが被災地の3日から10日くらいを撮影したものです。悲惨なものばかりではありません。よくご覧いただきたいと思います。

芦屋市は神戸市の東となりです。その隣が、苫小牧高校が優勝した西宮市です。後ろに六甲山があり、なだらかな勾配で大阪湾に面しています。芦屋市は小さな町で東西たった

2kmです。南北は六甲山の山ろくから大坂湾までたった5kmしかないのです。この中に当時、8万7千人の人が住んでいました。これは芦屋市の被害状況を示す地図です。芦屋市には工場が一つもありません。木造家屋が大半です。この地図で色が着いていますが、全壊（赤）、半壊（黄）、一部損壊（緑）です。市街地は真っ赤です。全半壊をあわせると7割を超えました。しかも亡くなった方も450人も出たのです。このことは阪神淡路大震災であまり報道されていませんが、被災地の中で一番酷かったのです。

芦屋市の古い建物が密集している地域では、ほとんどの建物が倒れてしまいました。まず屋根瓦から壊れてしまいました。今映っている映像は15年間前、阪神地域の大学に通う学生さんのアパートです。この中から、若い学生さんの亡骸を出さなければならなかったのが一番辛い体験でした。ご覧の通り、ほとんど木造家屋です。この映像に国道が映っています。地震直後、国道2号線は車で移動してもものすごい渋滞となって、歩道は歩けませんでした。国道脇の住宅では、倒壊家屋から何かを出していらっしやいます。今の映像では車がたくさん走っていますが、10日後くらいには支援物資を搬送する車両のみ通行可能になりました。震災直後はマイカーが多く、国道はびくともしなかったのです。こちらの映像の通り、2階建てのアパートは1階がかげも形もない状態です。芦屋には戦前から大きな屋敷がたくさんありましたが、木造であったこともあり、石積みごと倒壊してしまいました。

この映像は芦屋市立体育館です。避難所にもなっていました。今、おにぎりを配るところですが、皆さん落ち着いています。地震の10日後くらいのものでですね。ご覧いただいて分かりますと思いますが、体育館の中なのに、青天井になっています。体育館の屋根がもろに落ちてしまったのです。こんな大災害でも車で皆さん移動される。これが後々問題になるのです。

この映像は阪神間の幹線道路、国道43号線。ここに高速道路がある。芦屋を出て神戸になったところで、山側に600m横倒しになりました。高速道路の柱は1本柱。マスク、手袋、リュックサック、スニーカーでないと、被災地は歩けませんでした。道路がこのように落ちてきて、このマンションも1mくらいずれ落ちている。下水のマンホールは横を向いています。これは芦屋の浄水場で、残った水を自衛隊が汲み取り配布してくれました。これは県道だが、真ん中に亀裂ができ、谷側に割れていました。この道路は通行止めをする暇がなかったのです。電柱も倒れ、ほとんどこの道路は歩けませんでした。

芦屋市の市民会館では柱の表面が剥落しています。この建物はピロティ型といって1階に壁がなかったので弱かったという気がしています。昭和40年代に流行った建築方法です。

この映像は国道2号線で、震災後3日か4日くらいです。見てください。マイカーで道路は動けなません。2号線に面した7階建てのマンションも全壊しています。これは市役所です。前が消防で、ここにいるのは応援のタンク車から水をもらおうとしている被災された市民です。

次の映像は市役所の前の小学校です。体育館の中をしっかりとご覧いただきたいと思います。これは救援物資のおにぎりです。（体育館内の映像が映る）この通りです。体育館にぎっしりと被災された皆さんが来られたんです。この小学校には2000人もいらして、横になることができませんでした。市役所もあふれんばかりの人が来ました。この映像は4日後くらいです。こちらは市民会館のロッカーですが、一定の方向に倒れています。被災され

た皆さんはコンクリートの上に寝ておられるのです。芦屋市役所は 4 階建てですが、3000 人が避難しました。電気が 3 日後にともり、これは助かりました。

食料を配布しているのはボランティアの皆さんです。ここは市役所の災害対策本部となるところですが、こんなところで災害対策本部は 1 度も開かれませんでした。ここは被災した皆さんがきて、電話をするところになりました。ここは谷崎順一郎記念館で市立ですが、液状化していて、もう少しで全壊になるところでした。埋め立て地の場合には、必ず液状化します。

## 2) 被災地の行政職員としての体験（要約）

### (1) 被災直後、家族の安否確認から登庁まで

あの日の朝、私はぐっすり寝ていたのです。どかんという音とともに大きな建て揺れがありました。ベッドに寝ていましたが、放り投げられる形になりました。早く揺れがおさまってくれという気持ちでした。この 12、13 秒間で、6434 名の尊い命が奪われたのです。

私はようやく揺れが収まって、まず最初に、大きな声で家族 3 人を呼びました。家内が顔を出してくれたとき、このときほど助かったという思いになったことはありませんでした。私はすぐに家を飛び出したのですけれども、真っ暗闇でした。すぐに近くの集会所に公衆電話があったことを思い出し真っ先に飛び出していました。そして、10 円玉を入れたらかかったのです。そして奈良に家族 3 人は全員大丈夫だと連絡を入れたのです。このことが非常に重要でした。被災地からも安否情報をすばやく伝えておくことが非常に大事です。

こういうときは最小限の水と、最小限の食べ物くらいもって出るべきだったのですが、それすら忘れて車にとびのって市役所に出かけました。これが私の最初の重大失敗でした。神戸の幹線道路も裏道も車・車でびくとも動かないんです。もう辛抱しきれず、「歩いていくから、おろしてくれ」と頼みました。

芦屋に一番近い神戸市東灘区で女性に引き止められたんです。家族が生き埋めになっているんです。助けてやってくださいと。私は当時、芦屋市役所の建設部長をしていました。一刻も早く芦屋市役所にたどり着き、被災者対応をしなくてはと思っていました。「勘弁してください」と逃げるようにして立ち去りました。あのときに助けに入ってもらったら、助けられたのではないかという思いが、いまだに心に引っかかっています。

### (2) 芦屋市の初動対応

芦屋市役所では助役が一番に庁舎に到着し、職員に 4 つの大きな指示を出してくれました。

- ① 建設関係の職員は消防の皆さんとともに救命救助に行くこと
- ② 医師会会長に、避難所に救護所を開設してもらい、負傷者の方の手当てをして欲しいと依頼すること
- ③ お寺へ行き、ご遺体を安置させてもらうように依頼すること  
結局、市内のどのお寺も倒壊しており、遺体を安置することはできませんでした。
- ④ 市内の葬儀会社へ行かせて、棺おけを 100、ドライアイスを用意するように依

頼ること

この指示を、私はいまだに忘れません。よくあんな冷静な判断ができたと思います。皆さんのようなリーダーこそ、大災害のときは落ち着いて指示を出して欲しいのです。

### (3) 救命救助の成果と限界

私たち救助隊が1日目に芦屋市内で助け出したとき、勝負は1日でした。3日目になると助け出された人で生きている方はいませんでした。芦屋市の救助隊が助け出した人は、2割も達していなかったのです。あのとき尊い命を助け出してくださったのは、ほとんどが隣近所の町民の皆さんだったのです。しかも、地域をしっかりと見ておられるリーダーおられるところほど、たくさんの方が助け出されていったのです。これが一番大事なことです。

### (4) 被災者へのアンケート調査より

私はアンケート調査をしていますので、それを2つ紹介します。

#### ①この大災害で一番困ったこと

##### 第1位 電話の不通

「メールは届くかも知れません」とNTTの人が言っていました。大災害が起こったら、家族の安否確認が非常に重要になります。平素からどう連絡しあうか、どこで落ち合う、どこへ逃げていくか決めておくのが大事だと思います。災害伝言ダイヤルもありますので、確認してみてください。

##### 第2位 水と食料の確保

一番困ったことはトイレを流す水。トイレ回数を減らすために飲みたい水を減らし、食べたい食料を減らすことで結構病気になるれました。

#### ②この災害で役に立ったもの

##### 第1位 懐中電灯

##### 第2位 携帯電話

##### 第3位 バケツや風呂に水をためておくこと

入浴後の水を一晩おいておくことをお勧めします。

### 5) 家族を大切に、地域を見守ること

最後に、あの災害を乗り越ってくれた家内が、もう6年前になります。前の晩まで元気でおりましたのに朝起きたらなくなっていました。このときほど、家族の突然の死というのが、どんなに辛くて、どんなにさびしいことになるか。初めて経験しました。あの災害で突然、家族を亡くされた方の気持ちが初めて分かりました。家族ほどすばらしいものはありません。平素から家族と地域のことを見守って、しっかりと対応していただきたいと思います。皆さん、本当に今日は長時間になりましたが、こんなにも熱心に聞いていただいて、本当にありがとうございました。

## 浦河町内の防災事業の報告

### 【東町連合自治会 米山豊氏】

9月に東町連合自治会全体で、防災学習会と一泊避難所体験を行ないました。図上訓練では、各自治会ごとに、町が配布している防災地図を含めた大判地図を確認し、どこが危険か、大雨の時や地震のときの避難場所、避難経路を協議しました。また、一人暮らしの高齢の方の住まいを書き込み、避難するときに気をつけること、どのような状況で避難が困難になるかを話し合いました。炊き出し訓練も行い、参加したご婦人たちに作ってもらいました。最近是非常食も味を工夫していることが分かり、貴重な体験でした。

一泊避難所体験では、実際に避難所に泊まることを想定し、浦河町立ふれあい会館の中で、参加者が休むスペースの配分の仕方を考え、避難場所にある道具を使って一晩寝ました。小さな子どもたちや妊娠中の女性も参加し、それぞれの立場から避難したときに何が必要になるか体験を通して考えていきました。

2月に実施した冬期避難訓練では、水害のときの安全確保について講義を受けた後、東町生活館で寒さ体験を20分ほどして、ふれあい会館まで歩きました。

自治会として、災害時要援護者（高齢者、体に障害のある人など）にも配慮した援護体制が大事なと考えています。

災害が大きくなればなるほど、行政の対応が手薄になってくるでしょう。自治会の人協力しあい、対応していくことが大切です。ここで災害がどうなるか分かれ目になると思います。できれば一泊避難所体験を他の自治会にもして欲しいと思います。

### 【浦河町役場 小原 崇氏】

先日、私は日本防災士機構での講習を受けてきました。今日はいざというとき地域の力になれるようにと期待されている資格、防災士の話をしたいと思います。

現在、防災士は国内に4万人おり、道内には1300人が活動しています。防災士になるには、防災士機構の定める研修を行い、試験に合格しなければなりません。浦河消防署でも行なっているが救急救命士の資格も必要になります。

防災士としての役割を振り返りますと、平成7年の阪神淡路大震災が大きな転機になっていました。災害の規模が大きければ大きいほど、被害が甚大であればあるほど、救急車が走るなどは難しい状況になります。中越沖地震では3日断水になったところがあったといえます。防災士の間では、「地域や職場など全体で力をあわせる必要がある」といわれています。そのスタートは自分の安全は自分で守ることになります。自分が怪我をしては、周りの人の手を借りることになります。災害時発生時の自己対処が必要です。

小さい子どもやお年寄りが避難できているかどうかの確認では、日ごろのコミュニケーションが大事になるでしょう。一人暮らしのお年寄りへのケアは役場ですぐに手が回りません。現に阪神淡路大震災では1割近くの方が近所の方により助け出されました。行政としてもプライバシーに配慮しながら、地域社会の防災体制の確立が課題になっていますが、やはり地域の皆さんの助け合いが重要な役割を果たすことになります。そこで地域の実情を把握した防災士という存在が重要になってきます。

日常生活の中で持続的に防災事業をすることは難しいものです。防災士は、近所や家族に避難する必要性、安全のためにどのようなことをすべきか話すことができます。そし

て地域ぐるみで助け合えるような活動を展開できることを目的としています。

私は、家族、地域のために活躍する防災士が増えていくことを望んでいます。町役場としてもサポートする予定です。災害に強い街づくりを皆さんでしていきましょう。

**【浦河向陽園 瀬尾 泰治氏】**

浦河向陽園では、主な防災活動として、年に3回から4回、避難訓練をしています。そのうち、1回は屋外で炊き出しを行い、利用者たちと園内に備蓄されていた非常食を食べました。

防災事業に関する最近の問題点は、入所している利用者の方が徐々に高齢化してきて、自力での避難が難しくなっていることです。歩行が困難だけでなく、心臓が弱くなっている方もいて、迅速な移動は難しいのが現状です。園舎では職員が手薄になっている時間帯もありますので、何らかの対応策が必要になっています。

この写真は防災グッズです。利用者の防災グッズは、それぞれのグループホームの物置にしています。写真のように、リュックサック、靴、着替え、防寒具などを一人ひとり用意しています。防災グッズは、グループホームの利用者70名と、通所している利用者のために100個弱、用意しています。これも倉庫に保管しっぱなしではカビが生えてきたりしますので、天日干しを年に一度行なっています。グッズの選択は利用者自身が行ないました。

現在、避難訓練をしているのは入所施設のみで、5ヶ所あるグループホームはまだ実施していません。地区により避難場所や避難ルートが異なるので、今後、検討していきたいと考えています。

**【浦河べてるの家 清水里香氏】**

本報告書Ⅱ-4章「精神障害を持つ人たち自身による安全な避難方法の確立および避難時の自助促進に関する研究」参照

資料Ⅱ-14-2

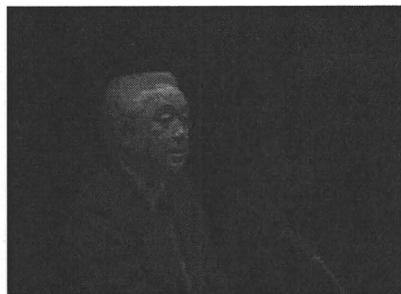
平成21年度 浦河町地域防災フォーラム（2010年2月23日 浦河町総合文化会館）



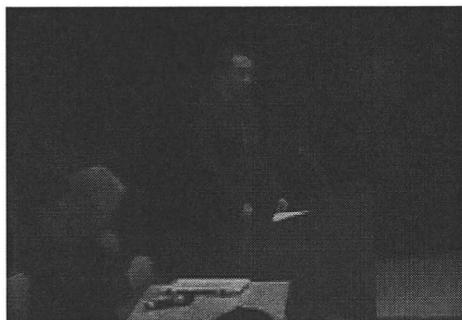
フロアの様子



基調講演：谷川三郎氏



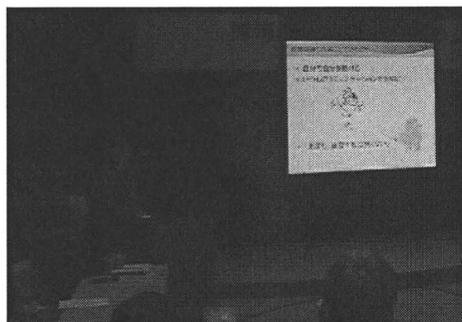
東町連合自治会 米山豊氏



浦河町役場 小原崇氏



浦河向陽園 瀬尾泰治氏



浦河べてるの家 清水里香



総評 国立障害者リハビリテーションセンター研究所 河村宏

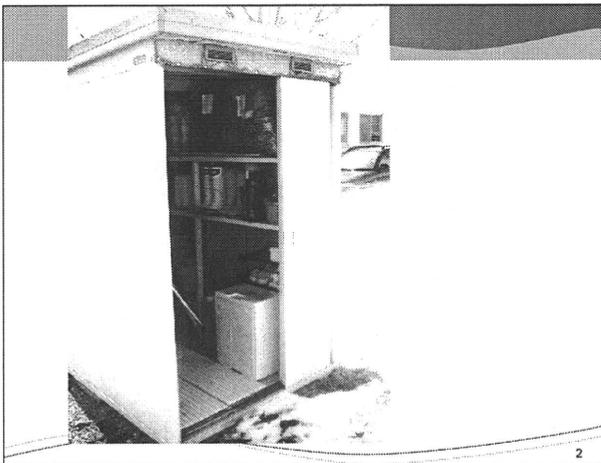
# 地域防災フォーラム

浦河向陽園 瀬尾 泰治  
浦河べてるの家 清水 里香  
スライド1～8

東町連合自治会・東町第5自治会 米山 豊氏  
スライド9～15

## 平成21年度 浦河向陽園の防災事業

- ・概要  
向陽園 利用者75名(夜間 40名)、職員 20名弱  
GH 5ヶ所(30名)  
あおぞら(事業所) 利用者25名、職員7名
- ・防災事業  
各場所での避難訓練を実施する予定(来年度あたりから)  
各GHに防災用グッズ(各個人で準備:着替え、靴、帽子、カッパなど)  
非常食1日分(およそ100名分)  
野外炊飯訓練



## 平成21年度 浦河べてるの家の防災事業

- ・9月29日～10月1日 通常期避難訓練  
津波注意報発生中の避難(目標の高さに4分で)  
長期入院経験者と一緒の避難訓練
- ・2月18日～25日 冬季避難訓練
- その他  
東町地区の防災事業に参加させていただいた

## 避難訓練で大事にしていること

- ・自分で自分を助ける
- ・いつものコミュニケーションを大切に



- ・「津波も、練習すれば怖くない」



9月30日  
南太平洋を震源とする地震発生  
津波注意報の中  
避難



共同住居  
からの避難

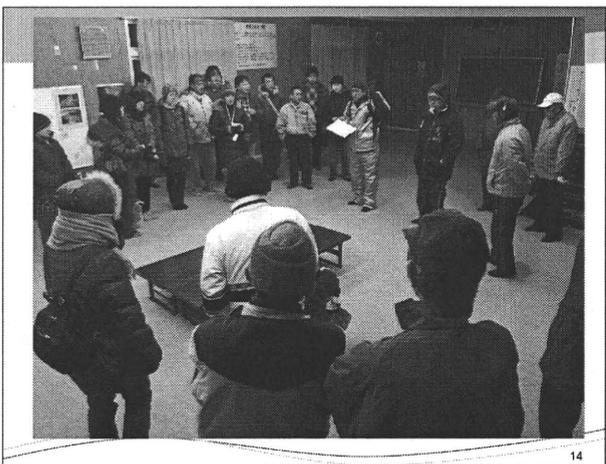
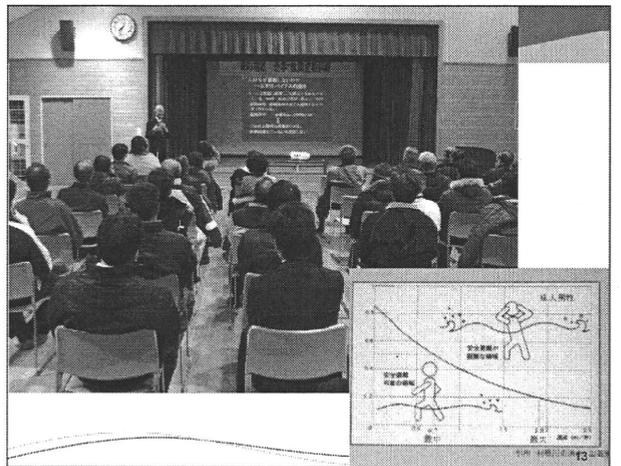
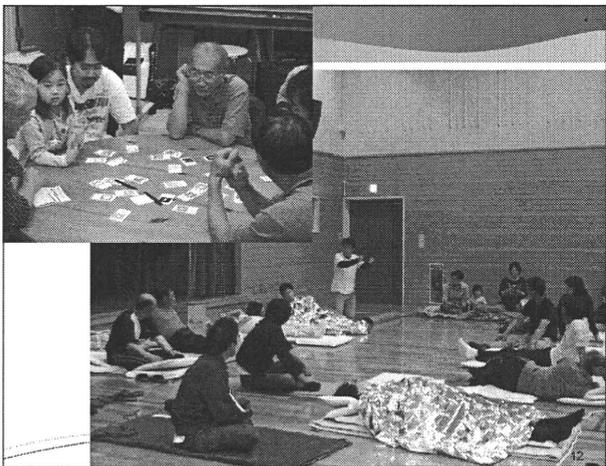
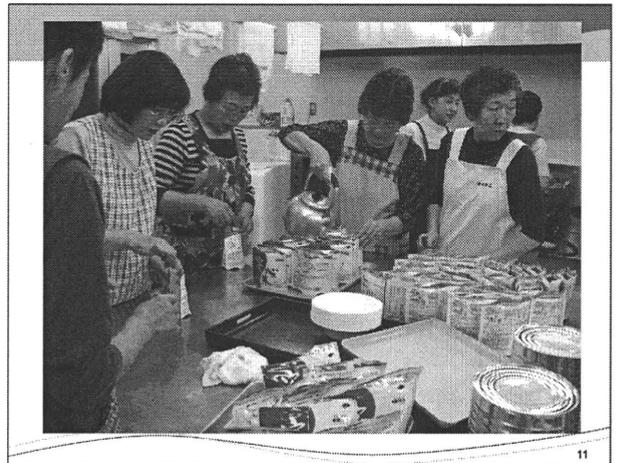
セミナーハウスからの避難  
「4分で標高10m」  
目標達成



平成21年度  
東町連合自治会の取り組み

- 9月4日～5日  
8つの自治会にて、防災学習会(約100人の参加)  
有志による一泊避難所体験(約35人の参加)
- 2月10日  
8つの自治会有志による、冬季夜間避難訓練(約45人の参加)

9



フィードバック資料1

奥尻島視察の報告

平成22年10月22日 於：合同会議

日程 平成22年9月1日～3日

参加者 12名（木下、早坂、石黒、松本、澤谷、宇毛、瀬尾、井上、本田、吉田、  
定池（人と防災未来センター研究員：奥尻島出身）、間宮）

行程 1日目：浦河→奥尻島内・被災地と復興状況の視察（宿泊）

2日目：奥尻島 青苗地区の人工地盤・津波記念館見学

奥尻町町議の方のお話（現在の復興状況と、被災前後の地域の変化）  
→江刺町社会福祉協議会 事務局長のお話  
（災害時要援護者リスト作成と避難方法 現在の取り組みについて）

3日目：知的障害者福祉施設・非常食加工工場「あすなろパン」の見学

視察で得られた知見

1) 奥尻町

秋田県沖を震源とし、10m以上の津波が襲った日本海中部沖地震（1983年、M7.1、死者104名）の際、奥尻島では南方より3m程度の津波が押し寄せ、島をなぞるように北上した。津波警報が発令されており、船の避難作業を行っていた住民らが、船の間に挟まるなどの重軽傷をおった。

津波が襲来したのは日中であったため、押し寄せる波がよくわかった。

この体験から、地震が発生したら、すぐに避難しなければ命が危ない。反対に、とにかくすぐに避難すれば助かると住民が意識するようになった。

北海道南西沖地震では、地震発生から5分弱で、奥尻島北端に津波が到着した。北部の漁村地区は壊滅的被害をうけ、現在は集落はなく、記念碑がたてられている（江戸時代より海難事故の多い場所として、供養碑が建てられていた）。

津波は南下、島を囲い込むように複雑な動きをしながら進んだ。日本海内側では20m以上の崖上まで津波が押しあがった。

奥尻島では、日本海中部沖地震の教訓が生かされ、住民の大半はすぐに避難した。しかし、夜間であったためすぐに移動できなかった人（衣服を着てから逃げようとした人、高齢者の方、小さなお子さんと親御さん一人のご家族など）には、避難が間に合わなかった人もいた。壊滅的な被害をこうむった集落の多くは、すでに無人化している。

その後の取り組み

- ・港に人工地盤を設置 ※働く人用。歩行困難な方の避難はこれから
- ・1階部分の柱を最小限にし、建物の倒壊を防ぐ 例) 小学校
- ・海岸沿いの住民のために、避難路に備蓄庫を設置（毛布・簡単な衣類を備蓄）